魔境育ちの全能冒険者（オールラウンダー）は異世界で好き勝手生きる!! 5

追い出したクセに戻ってこいだと？そんなの知るか!!

ALPHA LIGHT

アノマロカリス
Anomalocaris

アルファライト文庫

目次

第一章
「まお～しゅ～らい!?」
007

第二章
「しゅくめ～のたたかい!?」
179

Makyo Sodachi no All-rounder
Ha Isekai de Suki Katte Ikiru!!

主な登場人物

Main Characters



ザッシュ・ゴーダ

かつてリュカをパーティから追放した男。
魔剣の核を体に取り込み、邪悪な力を手に入れた。

シオン

ちょっぴり天然なリュカのパーティメンバー。
十八番は支援魔法！

リッカ

リュカの双子の妹。
聖女候補の修業をしている。
お金が大好きでずる賢いところも。

ガイアン

肉体に絶対の自信を持つ冒険者。
情報収集にも長けている。

グロリア

ラミア族と巨人族のハーフ。
穏やかで優しい性格の持ち主。

キッド

獣人の少年で、異世界からの転生者。
魔剣とレアスキル［調味料］で戦う。

シドラ

ダンジョン内で発見されたタイニードラゴン。
体に似合わずかなりの大食漢！

リュカ

本作の主人公。
全属性の魔法や卓越した剣術などあらゆる能力を使いこなすが、家族には頭が上がらない……？



第一章
「まお～しゅ～らい!?」

Makyo Sodachi no
All-rounder Ha
Isekai de Suki Katte Ikiru!!

第一話　魔神アトモスのダンジョン・前編（結構厄介なんですよね、ここって……）

僕、リュカは、一人、ダンジョンを歩いていた。

少し前までは手の甲にある紋章から召喚したタイニードラゴンのシドラと一緒に行動していた。

だが、シドラはこのダンジョンに食べ物がないと知ると、すぐに紋章に引っ込んでしまったのだ。

一人というのは中々に寂しいものだなぁ……それにこのダンジョンの攻略は相当大変だし……。

僕は内心で文句を言いながら、ここに来た経緯を思い出す。

元々、僕は妹であるリッカや、その他の仲間と共に、七大陸にある穢れを浄化する旅をしていた。

しかしその最中、とある魔物に呪いで子供の姿に変えられてしまった。

そのため元の姿に戻る手がかりを探しに、英雄である家族が暮らす故郷のカナイ村へ帰還。

だが、カナイ村は魔猟祭という狩猟祭を行っている最中に襲撃してきた、闇の魔力の塊である魔獣、黒天球に壊滅させられていた。

その後、僕が何とか黒天球を吸収したことで危機は去り、ついでにそれを体に取り込んだことで僕の姿も変化した。

まぁ、魔力を取り込み過ぎたせいで、逆に普段よりも成長した姿になっちゃったんだけどね。

そんなこんなで今度は壊滅した故郷の復興を手伝っていたら、元気になった家族により、修業という名目で、仲間と一緒にこのダンジョンにぶち込まれたというわけである。

相変わらず家族の皆はめちゃくちゃで参るよ……。しかもダンジョンに入った瞬間、仲間ともはぐれているし……。

ちなみにこのダンジョンはアトモスのダンジョンといい、魔力の宿った本――魔書の中に広がっている。

つまり、僕らは今、本の中にいるというわけだ。

《おい、相棒、このダンジョンにはどんな敵が出るんだ？》

腰に差している魔剣、アトランティカが念話で話し掛けてきた。
魔剣や聖剣などの特別な武器とは、鍛錬によって心を通わせると、会話が出来るのだ。
「そうだね……」
僕は過去にここに来たことがあるから、ある程度は敵やギミックのことを知っている。
記憶を辿ってから、アトランティカに説明を始める。
「ボスを除けば、基本的にこのダンジョンを徘徊している敵は二種類だけだったよ。それとは別に宝箱に擬態しているミミックはいたけどね」
《二種類？》
「うん。絡まった鉄の棒が人の形をしているような敵と、よく分からない六角形の敵がいたね。大きい知恵の輪とか、ルービックキューブに似ているかも」
僕が例に挙げたおもちゃは、かつてこの世界を魔王サズンデスから救った英雄、ダンが広めたものだ。
ダンは異世界から来た転移者で、ダンの世界にあったものを色々と伝えているらしい。
僕は過去を思い出しながら続ける。
「適切な対処が出来れば問題はないんだけど、厄介なところもあったなぁ」
《適切な対処とは？》

「そいつらはね、弱体魔法の類がほとんど効かないんだ。それに知恵の輪に似た方は細身で変なふうに動くから剣も当てにくい。だから広範囲をカバーできる攻撃魔法で戦うのが効率的なんだ」
《なら、シオンには不利な敵ということにならないか？》
「そうだね。天敵じゃないかな」
僕と一緒にこのダンジョンに入ったパーティメンバーのシオンは、その身に宿った呪いの影響で、通常の状態では攻撃魔法は一切使えない。
そのため、彼は補助魔法や弱体魔法を駆使して戦うのだが、それはつまり弱体魔法が効かない相手には攻撃手段がないということでもある。
一応魔力で杖に剣を生やして物理攻撃することは出来るのだが、シオンは剣士じゃないし、弱体魔法が効いていない敵に太刀打ちするのは不可能だろう。
アトランティカは悩んだように言う。
《覚醒を使えば多少は戦えるだろうが、それも時間の問題だろうしな……》
覚醒とは、聖剣や魔剣の力を身にまとい、自身を一気にパワーアップさせる技だ。
僕もシオンもリッカもこの覚醒を使えて、シオンはこの覚醒状態の間だけ、攻撃魔法を使用できる。

だが、覚醒できるからといって、全ての問題が解決するわけではない。
「シオンが覚醒を維持できる時間は五分弱だからね」
魔力を大量に消費する覚醒は、人によって使える時間が異なる。
僅か五分しか攻撃魔法が使えないようでは、このダンジョンを攻略できるとは思えない。
《当然、覚醒が切れたら……》
「なす術はなくなるだろうね、シオンが早々に誰かと合流していることを願うよ。でもこのダンジョンには面倒な仕掛けが一つあってね……」
《まだ何かあるのか？》
「このダンジョン内では、空間系の魔法が一切使えないんだ。だから転移魔法で効率よく移動することも出来ないんだよ」
この仕掛けがなかったら、姉妹武器の元に転移するアトランティカの能力――［同調］を使えば楽にシオンと合流できるんだけど、そう簡単にはいかないということだ。
《なるほど、それは面倒だな。それに空間系の魔法が使えないということは、収納魔法も使えないのだろう？》
アトランティカの問いに僕は頷く。
収納魔法は生物以外の物ならなんでも、時を止めた状態で異空間に収納できる便利な魔法だが、これも空間系の魔法なのでここでは使えない。
「その通り。だから収納魔法に入れている魔道具とか食料とかも取り出せないね」
僕が最初にこのダンジョンに入ったのは十四歳の時だけど、その時は食料が足りず、最終的には数日間くらい飲まず食わずだったんだよね。
そのせいで力が出なくて、最終的にボスに負けてしまったんだ。
《つまり、早々にクリアしなければマズいということだな》
「そうだね。最悪ミミックを食べることになるかもしれない」
ミミックは一応食べられなくはないのだが、全く美味しくない。
当然、そんな事態は極力避けたいに決まっている。
僕がミミックを食べる場面を想像していると、アトランティカが思い出したように言う。
《そういえば先ほどミミックがいると言っていたな。ここには宝箱が多く置かれているのか？》
「そうだね。昔僕が入った時は、色々なところに宝箱が置かれていたよ。レアアイテムが入っていることもあったけど、ミミックも多かったな」
《［鑑定］スキルで調べられなかったのか？》
「このダンジョンの難易度が高いからなのか、［鑑定］を使っても偽装が見破れなかった

んだよね」

《そうか、すると約一名、思い切りミミックに引っ掛かりそうな人が思い浮かぶな》

アトランティカの言う人物とは、お宝やお金が大好きなリッカのことだろう。

そういえばリッカはここに入る直前に逃げ出したけど、結局どうなったのだろうか。

まぁ、家族の皆から逃げられるとは思えないし、結局捕まってこのダンジョンに入れられているとは思うけど……。

［鑑定］で判定できないとなると、もしお宝好きのリッカが宝箱を見つければ、あっさりとミミックに引っ掛かりそうだ。

そんなことを思っていると、突如として周囲に嫌な気配を感じた。

僕は咄嗟にアトランティカを抜き、身構える。

するとアトランティカは不思議そうに言う。

《敵の反応か？　索敵魔法には引っ掛らないが……》

「このダンジョンでは敵は突如として壁や床や天井から出現するからね。索敵魔法は当てにならないんだ。肌の感覚だけが頼りだね」

剣であるアトランティカは普段から魔法やスキルで索敵や敵の分析をしてくれているけれど、このダンジョンでは頼れないというわけだ。

このダンジョンの厄介さをつくづく感じていると、やはり壁から大量の魔物が現れ始める。

「来たね……知恵の輪の方の敵だ」

気が付くと、あっと言う間に僕の目の前には、数十体の魔物が並んだ。

《相棒の言う通り、鉄の棒が人の形をしているといった感じだな。かなり細身で動きも独特だ。これは確かに剣で攻撃を当てるのはキツそうだな》

「分かってくれた？　あっ、そういえばさっき魔法で攻めるのが有効って言ったけど、あともう一つの倒し方もあった」

《なに？　どんな方法だ？》

「仲間と協力して敵を押さえ付けてから、知恵の輪みたいになっている頭の結合部を解けば、アイツらは動きを止めるんだ」

《なんていうか……ふざけた魔物だな！》

アトランティカの言う通り、本当にふざけた魔物だ。

ちなみに魔物の頭部の知恵の輪は全てが同じ作りをしているというわけではない。

低難度から、高難度まで様々だった。

以前ここに潜った時、低難度のものはすぐに解けたんだけど、高難度の場合だと難しく

て解くのを断念して、結局皆で袋叩きにして無理矢理倒したことがあった。
その時は、アイツの硬さにビックリしたことを覚えている。
あっ、折角だし、当時と今でどれくらい僕が変わったか、試してみるか。
僕は口を開く。
「ちなみにアトランティカに聞きたいんだけど、あの敵は斬れる？」
《対象物に触れてみないことには何とも言えないが……鉄程度の硬さならば切断は可能だろう》
「なら、攻撃を当てて試してみよっか！」
僕はアトランティカを振りかぶり、魔物に斬りかかっていった。
すると、僕の斬撃により、魔物はあっさりと真っ二つになる。
斬った感触がないくらいに簡単に切断することが出来た。
それに感動を覚える。
これは僕の腕が上がったこともあるだろうが、武器の差も影響しているだろう。
以前は鋼鉄の剣を使っていたけど、今回は伝説の魔剣であるアトランティカを使っているからね。
僕は伝説の魔剣を使えることが嬉しくなり、次々と魔物を切り伏せていった。

◆　◆　◆　◆

ボク、シオンはダンジョンの中で、無数の宝箱が設置されている宝物庫を見つけた。
ちなみにボクの隣には、リッカさんの姿もある。
たまたま近くに出現したボクとリッカさんはすぐに合流できたのだ。
ちなみにリッカさんは彼女の父方の祖母であるカーディナル様に捕まり、このダンジョンに入れられたらしい。
気の毒だとは思うけど、リッカさんと合流できたのはボクにとってはラッキーだ。
リュカさんに以前聞いていた通り、ここの敵には弱体魔法がほとんど効かない。
でも攻撃魔法が得意なリッカさんと合流できたことで、ボクは無事でいられたのだ。
そうして二人で探索を続け宝物庫を見つけたのだが、それを前に、リッカさんが叫ぶ。
「もう、何で収納魔法が使えないのよ!?　これじゃあお宝が持って帰れないじゃない！」
「転移魔法も発動できないですし、このダンジョン内では、空間魔法の類が使えないみたいですね……そういえば、ここに入る前にカーディナル様が、生きて帰れたら伝説級のアイテムを持って帰れると言っていましたが、その表現にも納得です」

以前聞いた言葉を思い出し、ボクは呟いた。
するとリッカさんが疑問を投げ掛けてくる。
「どういうこと？」
「収納魔法にお宝を入れられれば、殺されてダンジョンの外に出ても、お宝をゲットできるじゃないですか。でもここでは空間魔法が使えないので、お宝が欲しければ自分で抱えて正式にダンジョンをクリアしなければならない。そういうことですよ」
説明を聞き、リッカさんは怒ったように地団太を踏む。
「リュカ兄ぃはこのダンジョンに入ったことがあったんだし、前もって言っておいてよ‼これだけのお宝を持って帰れないだなんて……生殺しだわ！」
ボクは特に財宝とかには執着がないので、持っていけないのなら置いていくしかないと思う。
でもリッカさんは意地でも持っていこうとしているようで、ひたすら空間魔法を使用しようと足掻いていた。
その様子を見て呆れつつも、少しの不安も感じる。
ボクもリッカさんも移動する際は荷物のほとんどを収納魔法に入れている。
そのため、現時点でアイテムや食料などは持ち合わせていない。

これでは長期間ここで過ごすことは出来ないはずだ。
ボクが今後のことを考えていると、リッカさんが口を開く。
「そういえばさ、シオンってリュカ兄ぃと同じで闇魔法の［奈落］が使えるって前に言っていたよね？」
「まぁ、使えはしますが……」
［奈落］とは対象を小さい闇の球体の中に閉じ込める魔法だ。
「ならさぁ、シオンの［奈落］でお宝を持ち運び――」
「出来ません」
リッカさんの狙いを理解したボクは、最後まで言葉を待たずに返答した。
「え、なんで？」
「ボクの［奈落］は有機物しか入れられないんですよ。無機物は入れた瞬間に消失してしまうんです。だから物を持ち運ぶのには使えませんよ」
「そっか……［奈落］って言っても、リュカ兄ぃと同じものではないのね」
リュカさんはボクより闇魔法のレベルが圧倒的に高い。
そのため、同じ魔法でも効果が違うのだ。
リッカさんはがっかりしたように肩を落としたが、小さく「あっ」と漏らすと、すぐに

顔を上げた。
そしてボクの服を見ながら口を開く。
「シオン、服を脱いで」
「はい？」
突然の言葉に、思わず変な声が出てしまった。
そんなボクを無視してリッカさんは続ける。
「収納魔法が使えないなら！　自分の手で抱えるしかないでしょ！　シオンのローブは大きいし、それに包めば持ち運びやすくなるはず！」
その説明を聞いてリッカさんのやりたいことが何となく分かった。
要するにボクの服を手ぬぐい代わりにして、それに包んで宝箱を持っていこうというのだ。
まぁ、それなら素手で抱えるよりは多少は持ち運びやすいかもしれないが……。
「絶対に嫌です」
別に外套を脱いでも、下には服を着ているので問題はない。
だけど、そんな使い方をしたら服が傷むに決まっている。
しかしリッカさんはボクに詰め寄ってきた。

「ちゃんとダンジョンから出たら返すから！」
そういう問題じゃないし、リッカさんなら最悪服を返してもらえない可能性すらある。
でも彼女のこの熱量、回避できる言い訳は何かないかなぁ？
そんなことを考えていると、リッカさんは背後に立ってボクの外套の紐を外し始め……。
「って、何をするんですか!?　やめてくださいよ!!」
咄嗟に振り向き、リッカさんから距離をとった。
すると彼女は悪びれもせずに言う。
「シオンが踏ん切りが付かないみたいだから、脱がせてあげようと思って」
「踏ん切りが付かないんじゃなくて、嫌だって言っているんですよ！　やるなら自分の服でやったらいいじゃないですか！」
ボクが叫ぶと、リッカさんは自分の体を腕で抱き、ボクにジト目を向けてくる。
「私の服ってそんなに大きいものでもないし、そもそもこれを脱いだら下着になるんだけど……」
「ボクは別に気にしませんよ、リッカさんの下着姿を見たところで何とも思いませんし」
「シオン、それはどういう意味!?」
「言葉通りの意味ですよ」

リッカさんは怒っているようだが、ボクは続ける。
「まぁ、リッカさんは外見は美少女ですし、スタイルもいいと思いますけど……中身を知ると、まぁ……って感じですからね。お金には汚いですし、性格もずる賢いですし、とても聖女候補とは思えません。そんな人の下着姿を見たところで何とも思わないですよ」
常日頃から思っていたことを言うと、リッカさんはボクを睨みつけてきた。
「シオン……よくもまぁ、本人を目の前にして好き放題言ってくれるわね」
普通の人ならその視線に怯むこともあるかもしれないけど、リッカさんの中身を知っているボクは怖いとは思わなかった。
ボクがケロッとしていると、これでは効果がないと思ったのか、リッカさんが溜息を吐き、口を開く。
「……分かったわよ。頼みを聞いてくれたら、今度デートをしてあげる」
「遠慮します、ボクにも選ぶ権利はありますので」
しかし、今度も即答する。
するとリッカさんは再び怒り声を上げる。
「私じゃ不服だとでも言いたいの⁉」
「デートをしたとしても、費用は全てこっち持ちで、さらに有り金まで全て奪われそうなので」

ボクの言葉を聞くと、リッカさんは文句を言いながら両手をブンブンと振りだした。
彼女の外見に騙されている人がいたら、この姿を見せてあげたいよ。
リュカさんは謙虚で人当たりもいいのに、同じ血が入っているとは思えないなぁ。
しかしそんなことを考えていても埒が明かないので、ボクは落ち着いて言う。
「ボクの服を使うことは諦めてください。でもどうしてもお宝を持っていきたいと言うのなら、アイデアを提示することくらいなら出来ます」
「アイデア？」
「単純に、箱を手で抱えて運ぶんですよ。宝箱の大きさ的に二つは抱えられるはずです。ボクが身体強化の魔法を掛けますから、それならリッカさんでも持ち上げられると思いますよ」
「女の子に宝箱を担げって言うの⁉」
「それ以外方法がないんですから仕方ないじゃないですか。嫌なら置いていくしかないと思います」
ボクは落ち着いた口調で答えた。
するとリッカさんは少し悩んだ後で、半ばやけくそといった感じで叫ぶ。



「無事にダンジョンから出られたら、このお宝は全部私のものだからね！」
「いいですよ。ボクは別にお金に困っているわけではありませんから。それより、さっさと皆と合流しましょう」
そう言って、ボクはリッカさんに身体強化の魔法を掛けた。
すると、リッカさんは宝箱を二つ積み上げ、手を掛ける。
「分かったわよ！　って、重っ！」
「いくら身体強化をして力が上がっているとはいっても、重さを感じないわけではないですからね」
「シオン、一つ持ってくれたりは？」
「しませんね。自分で持っていってください。持っていけないのであれば、いつでも置いていっていいんですし」
ボクがそう言うと、リッカさんはブツブツと文句を言いながらも二つの箱を持ち上げる。
そうして、ボクらは歩き出した。
こんな状態で敵に出くわさなければいいんだけどな……。

◆　◆　◆　◆

シオンとリッカが歩き始めたころ、シオンと同時にダンジョンに入れられたガイアンも探索に励んでいた。

そして、ガイアンもシオン達と同じように、宝箱を発見する。

ガイアンは宝箱の中身を見て、歓喜の声を上げる。

「おいおい、このダンジョンには本当にレジェンド級の装備が落ちているのか！」

宝箱にはガイアンが現在使っているものより、遥かに性能が高いガントレットが入っていた。

その性能の高さは鑑定系のスキルを使えないガイアンにも一目瞭然だったのである。

ガイアンは新たに見つけたガントレットを装備し、再び歩き始めた。

その最中、周囲を見ながら呟く。

「それにしても誰とも会わないが、本当に皆はこのダンジョンにいるんだよな？」

ガイアンは現時点で、誰の姿も見ていない。

そのことに不安を感じつつも、探索を続けるのだった。

◆　◆　◆　◆

さらに別の場所では、リュカと共にダンジョンに入ったキッドがグロリアと二人で行動していた。

ちなみにグロリアもリッカと同じように、修業という名目でカーディナルにこのダンジョンに入れられ、すぐにキッドと合流したのである。

しかし、二人の間には会話がほとんどない。

というのも、この二人はカナイ村にいた時から会話をする機会が少なく、何を話したらいいのかが二人共分からなかったのだ。

キッドは隣を歩くグロリアを見ながら内心で考える。

（参ったな……俺はこの女とあまり話したことはないし、何か話題になることはないか？）

すると、キッドの心を見透かしたように、グロリアが口を開いた。

「すみませんキッドさん、何だか気を使わせてしまっているみたいで……」

その言葉にキッドは首を横に振る。

「いや、何というか……共通の話がないかと思ってな。ただ俺はこの世界の住人ではない

し、中々に難しく……」

「この世界といえば、お師匠様から聞きました。キッドさんは異世界から転移してきたと」

「そうだな。俺はリュカと協力して魔王を倒すため、この世界に来たんだ。それにしても、お師匠様？」

「はい、クリアベール様です」

グロリアの説明を聞き、キッドは納得したように頷く。

「あぁ、グロリアはクリアベールと使う魔法が一緒だと聞いたことがあったな」

「はい。そのため、今は指導をしてもらっています。キッドさんはカナイ村に来るまでに、お師匠様と一緒に旅をなされていたのでしょう？」

「レイリアと三人でな」

キッドがそう言うと、グロリアは目を輝かせながら言う。

「あの二人の英雄と一緒に旅が出来るだなんて……キッドさんは凄いです」

「レイリアもクリアベールもかつて魔王を倒したパーティの一員らしいな。だが俺にとっては婆さん達との旅という感じだったよ。当時の姿は知らないしな」

キッドが小さく笑うと、グロリアもそれに合わせて微笑んだ。

その後、グロリアは思い出したように言う。

「そういえば、これもお師匠様から聞いたのですが、キッドさんは剣聖とも呼ばれる転移者、飛鳥様のお兄様でもあるのですよね」

「そうだ。俺のいた世界とは時間の流れが違うせいで、飛鳥がこの世界に来てから随分時間が経っているようだがな」

「私は飛鳥様の活躍を書物でしか知りませんが、実際の剣聖飛鳥様とは、どのような方だったのですか？」

思いがけない問いに、キッドは少し考えてから口を開く。

「そうだなぁ……この世界の書物にどう書かれていたかは分からんが、元いた世界での飛鳥は年相応の女の子と大して変わらなかったな」

「そうなのですか？」

「アイツは虫が嫌いで、特に脚の長い昆虫が苦手だったな。他にも、男女問わずモテていたし、分け隔てなく接していたが……ある人物の前に出ると、照れて何も言えなくなって、押し黙っていたな」

キッドの言葉を聞きながら、グロリアはどこか楽しそうな表情で頷いていた。

（ふっ……恋愛話というのは、どの世界でも、どの種族でも盛り上がるのだな）

キッドは内心でそんなことを思いながら、話を続ける。

するといつの間にか、二人の間にあった壁のようなものは取り払われていた。
そうして二人が打ち解けた後で、キッドは周囲を見ながら言う。
「それにしても、ここのダンジョンの壁や天井は全て同じ模様で迷いやすそうだな？」
「そうですね、傷でも付ければ目印になるでしょうか」
そう言ったグロリアは、壁に大きな傷を付けた。
しかし、その傷は次第に小さくなっていく。
その様子を見てキッドが口を開く。
「傷が直り始めているように見えるが？」
「ダンジョンによっては、そこで死んだ魔物の死骸が勝手に除去されたり、傷付いた壁が自動で修復したりするといった話を聞いたことがあります。このダンジョンもそうなのかもしれません」
グロリアの説明を聞き、キッドは呟く。
「だとすると、目印の類は無意味になるというわけか……そうなってくると、リュカ達と合流するのは中々に難しそうだな」
「そうですね。このダンジョンはかなりの広さみたいですし、上手く合流できればいいのですが……」

キッドとグロリアは、そんなことを心配しながらも様子見をしつつ移動を続けるのだった。

第二話　魔神アトモスのダンジョン・中編（他の者達は……？）

僕、リュカはあれから敵を倒して、再びダンジョンの探索を行っていた。
そして一時間ほど歩いたあとで、黒い靄が掛かっている二つの人影を見つけた。
その人影を見たアトランティカが言う。
《あれは……魔物なのか？　一人は宝箱を担いでいるように見えるのだが……？》
「あっ、そういえばあのギミックもここにはあったんだった！」
《ギミック？》
疑問を抱いているアトランティカに僕は説明を続ける。
「このダンジョンは一部の仲間の姿が判別できなくなるようになっているんだよ。すっかり忘れてた」
《なるほど、つまりあの二人は相棒の仲間の誰かということか》
「そうだね。でもあの状態の人とは会話や念話も出来ない。どんなに意思を伝えようと大

声を出しても理解不明な言語になってしまうんだよ」

昔このダンジョンで仲間と同士討ちになったことを思い出しながら、僕は答えた。

しかし、アトランティカにはまだ分からないことがあるらしい。

《ん？　ならばなぜあの黒い靄は二人一緒に行動しているのだ？　あの二人もお互いを認識できないのでは？》

「そこが余計厄介なところでね。全員が黒い靄に見えるんじゃなくて、黒い靄に見える人はランダムに決まるんだよ。普通に見える仲間もいるからこそ、この黒い靄が仲間だと気付きにくいってわけさ」

《このダンジョンはつくづく面倒だな……》

「そうだね」

僕は返事をすると、改めて目の前の二人を観察する。

どうやら向こうも僕を見つけたようで、二人は殺気を放ってきている。

一人は抱えていた宝箱も地面に置いていた。

「宝箱を担いでいる……となると、もしかしたら一人は……？」

僕の呟きの意図を察したアトランティカが反応する。

《あぁ、オレも一人はリッカではないかと思っている。だが、もう一人は分からんな》

「そうだね。でもヒントはある。体格は黒い靄でもそこまで大きくは変わらないんだ。あの体格ならシオンかキッドさんじゃないかな」

このダンジョンに入っているはずのガイアンは、かなり大柄なので黒い靄が掛かっていても何となく分かるはずだ。

リッカがここにいるってことはグロリアもいてもおかしくないけど、グロリアはガイアンよりもさらに背が高いので、ここでは考える必要がないだろう。

「シオンだったら何とかなると思うけど、もし相手がキッドさんで、こっちに襲いかかってきたらアウトだね」

だが幸いなことに、向こうも様子を窺っているようで、特に攻撃とかはしてこない。

《キッドか……飛鳥以上の剣の使い手で、相棒の祖父ジェスターよりも強いのなら、今の相棒でも荷が重いだろうな》

アトランティカの言う通り、キッドさんはこの前、剣聖とも呼ばれるとー祖父ちゃんに決闘で勝利していた。

「荷が重いどころか、僕では勝てないよ。この状態の姿でとー祖父ちゃんと戦ったことはないけど……恐らく僕はまだとー祖父ちゃんにも勝てないと思う」

相手がキッドさんだったら、一瞬の油断が命取りだ。

僕はアトランティカを改めて構える。
《相棒、相手にこちらのことを伝える手立てはないか？》
「そこが難しいんだよね。僕の得意の闇魔法を使えば分かってくれるかもしれないけど、向こうはこのダンジョンの敵は闇魔法を使うんだと思うかもしれないし……」
《相棒以外は皆、このダンジョンに入るのは初めて。つまり、そもそも黒い靄が仲間なんて発想すら抱かないかもな》
アトランティカの言葉に僕は頷く。
結局、僕が以前入った時も、最終的に仲間と合流することは出来なかった。
どうにかこの黒い靄を解除出来ればいいんだけど……何か解除する条件のようなものはないんだろうか。
そんなことを思っていると、リッカ……と思われる相手が聖属性の魔法の「ホーリーランス」を放ってきた。
僕はその全てを手で弾き飛ばす。
これで先程まで宝箱を担いでいた相手が、リッカだという確証を得られた。
僕の仲間で聖属性の魔法を使えるのはリッカだけだからね。
だけど、もう一人の方は何もアクションをしてこなかったために、未だに誰なのかが分

からなかった。
僕は念のため二人から少し距離を取って、呟く。
「うーん、キッドさんかシオンか、一体どっちなんだ？」
《リッカに相棒のことを伝えれば、残る相手がキッドだろうとシオンだろうと攻撃してくることはなくなるだろう。二人にしか分からない合図などはないのか》
「う〜〜〜ん？　何かあったかなぁ……リッカに僕だと分かる合図かぁ……？」
《兄妹なのだから、何かしらあるだろう！》
「……と言われてもなぁ？　う〜〜〜〜ん……あ！　あるにはあるけど……ソレをやってしまうと、僕は後でリッカに殺されるかもしれないんだよね……」
一つ思いついたのは、とある魔法を使うというアイデアだ。
とはいえ、この魔法は禁術ともされているため、使うのは正直まずい。
だがアトランティカは僕の心配を無視して言う。
《この際だから、出来ることはなんでもやってみろ！　それに相棒は死んでもオートで蘇生するだろう》
アトランティカの言う通り、僕は魔力がある限り死んでも自動で蘇生してくれる魔法「オートリレイズ」を常に自分に掛けている。

しかしだからと言って、死ぬのは当然苦しいのだ。
僕は少し考えた後で答える。
「他人事だと思って……けど、仕方がない。あまり気が進まないけど、やってみるしかないか！」
そうして、僕はあの魔法の準備に取り掛かった。

◆　◆　◆　◆

リッカとシオンがリュカと出会った時、二人は目の前にいる黒い靄に驚いていた。
シオンは黒い靄となったリュカを見て言う。
「あの魔物、気配が明らかにこれまでに出現してきた魔物とは違いますね？　かなり強そうです」
「シオンも分かる？　これは気合を入れないと、通してくれそうにはないかもね……」
リッカは、担いでいた宝箱を降ろして柔軟体操をする。
「やっと軽くなったわ！」
「というか、宝箱のために必死になり過ぎですよ！　結局あれから一瞬も放さなかったんですから！」
シオンはつっこむが、リッカは冷静な口調で言う。
「そんなことを言っている場合じゃないと思うんだけど？　とりあえず、私が威嚇射撃をしてみるから、シオンは相手の反応を見ていてくれる？」
「……それもそうですね。分かりました」
シオンの返事を聞き、リッカは中級魔法の［ホーリーランス］を放った。
空中に出現した五本の光の槍は、相手目掛けて飛んで行く。
しかし、黒い靄は全てを手で弾き飛ばした。
その様子を見て、リッカとシオンは唖然とした表情を浮かべる。
「私の［ホーリーランス］が……」
「あの相手……手で全て払っていましたよ……」
「そんなことを出来る相手なんて、家族の皆くらいしか思い付かないんだけど……」
「つまりあの敵は、リッカさんの家族――【黄昏の夜明け】並みの力があるということですか⁉」
シオンの驚いたような言葉に、リッカは神妙な顔をして頷く。
リュカの心配通り、リッカとシオンは、目の前の相手がリュカだという発想すら持って

いない。
　リッカは再び武器を構える。
「シオン、本気を出す準備しておいて！　私ももっと強力な魔法を撃つから！」
「分かりました。中級魔法を素手で払い除けた相手。ともなると、簡単には勝たせてもらえそうもない……って、何ですかアレは⁉」
　シオンは驚愕したように黒い靄を眺める。
　黒い靄が手を掲げると突如として無数の黒い触手が出現したのだ。
　それらはうねうねと動きながら、リッカとシオンに向かって迫ってくる。
　その触手にリッカは、なす術なく捕らわれてしまった。
　シオンも触手に捕まることを覚悟したのだが、なぜか触手はシオンではなく、全てリッカに向かっていく。
（何故ボクには襲いかかってこないんだ……？）
　シオンが疑問に思っている間にも、触手はリッカに絡みついていく。
　触手は既に彼女の手足を拘束しており、更に服の下にまで侵入していた。
「ちょ……どこ触って、あぁん……」
　リッカの体は、黒い触手に責められてビクッと跳ね上がった。

　そんな状態を見て、シオンはオロオロしつつも尋ねる。
「リッカさん、これは一体何なのですか⁉」
「これは……触手を召喚する……闇魔法の「触手」で、以前に英雄ダンが……あぁん！」
「えーっと……ボクはどうしたらいいですか？」
「とりあえずこの触手を何とかしてよ！　ただ、私の方はあまり見ないで！」
　恥ずかしそうにそう言うリッカに、シオンは答える。
「見ないで何とか出来るわけないじゃないですか！　無茶振り過ぎますよ！」
「そんなことを言いながら、私の体を眺める気でしょ？」
「前にも言いましたが、ボクはリッカさんには全く興味がありませんので、見たところで何も気にしませんよ！」
「それはそれで、なんかムカつく！」
　リッカと会話をしながらも、シオンはとりあえず状態異常を治す光の魔法を触手に向かって放ってみた。
　すると触手は、リッカの体から少しずつ離れていく。
　やがて彼女は自由になった。
　リッカは地面に手を付き、激しく息を吐きながら、乱れた服を直していく。

そして服をもとに戻すと、黒い靄が掛かった相手を激しく睨んだ。
「もう、許さないからね‼　シオン、覚醒するわよ！　アイツをボコボコにしてから、ぶっ殺してあげるわ‼」
「ぶっ殺すって……仮にも聖女になろうという人が、言ってはいけない言葉な気がしますが……」
シオンは溜息を吐きながらも、覚醒のため体中に魔力を循環させ始める。
リッカもシオンと同じく体中に魔力を循環させる。
そしてリッカが号令を掛けると、同時に覚醒したのだった。
「さぁ、覚悟しなさい！　私を辱めたお礼をたっぷりとしてあげるわ！」
そうして、リッカとシオンは黒い靄に向かって進んでいった。

第三話　魔神アトモスのダンジョン・後編（同士討ち始まる？）

黒い靄が掛かった二人が覚醒を行ったのを見て、僕、リュカは呟く。
「覚醒か……これで、もう一人がシオンだということがわかったね」

立ち読みサンプル
はここまで

《あぁ、キッドは覚醒の類は使えないと言っていたからな。それにしても、なぜ［触手］をリッカに使ったんだ？》
アトランティカの疑問に僕は答える。
「リッカには昔［触手］を使ったことがあったんだ。その時にめちゃくちゃブチギレられたから、これなら気付いてくれると思って……」
《……たく、なんだその発想は……それに向こうは気付くどころか、戦う気満々みたいだぞ》
確かに、リッカはさっきから大量の魔力を放出している。
「うーん、参ったなぁ……」
《というか、相棒も覚醒すれば、向こうも気が付くんじゃないか。流石にダンジョンの相手が覚醒するとは相手も思わないだろう？》
「まぁ、そうかもしれないけど、魔力を温存するために、なるべく覚醒は使いたくないんだよね。それにこっちが覚醒しても向こうが気にせず攻撃してくるのはかなりまずい」
僕も覚醒を使ってそのまま戦闘になると、今の僕の力なら、下手すると二人を殺してしまいかねない。
何とかいい方法はないものかと思っていると、シオンが僕に向けて炎属性の極大魔法、